

狂言

伝統芸能の「狂言」の語源は、仏教用語が由来です。話を大げさに盛つたり、飾り立てたりすることを「狂言綺語」といい、人を惑わす言葉として経典に出てきます。この「狂言」が伝統芸能の「狂言」に当てはめられました。

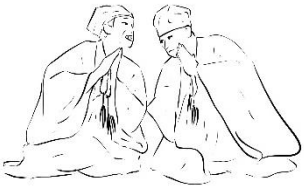


二年のイナゴが成長してキマヨした。サる佐助

「狂言」の源流は、動物や人物の滑稽なしぐさを表現した猿楽です。そこから、舞や歌を用い抽象的表現に進んだのが能です。猿楽の滑稽さが進んだのが「狂言」です。

能にも「狂言」にも、浄土教が土台となっている演目があります。「宗論」は、日蓮宗の僧侶と浄土宗の僧侶が南無妙法蓮華経と南無阿弥陀仏のどちらが優れているのか争い、ぐだぐだになり、結局お互い認め合うという結末で落語にもなっています。

「悪太郎」は、やんちゃな青年とそれをなんとかしたい叔父が、青年が寝ている隙に青年の髪を剃り、お前の名前は南無阿弥陀仏だ！とお告げのように、出家させていくという演目です。「悪太郎」はいずれいずれ節談説教にしたいなーと考えております。



こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

警策

真宗で行う事のない座禅のお話です。座禅をイメージ



してください。木の棒で肩をパンと叩かれるシーンを思い浮かべてください。その木の棒の事を「警策」と言います。「警策」をどう読むかは宗派によって異なります。「きようさく」と読むと曹洞宗、「けいさく」と読むと臨済宗・黄檗宗となります。この度はあいうえお順で早い方の「きようさく」という読み方で統一致します。素材は樫の木でできていることが多い、ある程度の痛みは生じるそうです。

では、何のために肩をたたくのでしょうか。「警策」は「警覚策励」の略で、目覚めさせ励ますという意味があります。集中できていないときや、寝ているときに、パンと打つそうです。打つ時も不意に打つわけではありません。右肩にまずは軽く乗せ、打つ側は一度礼をします。その後にはパンと打ちます。打たれた側は、その後礼をします。右肩の理由は、左肩には袈裟がかかっているからです。打つ側も打たれる側も礼をする。座禅以外でも、様々な社会で通用する指導の心得ではないでしょうか。何事もまずは礼をしてから。

